

## 透析患者における終末期の「事前指示書」の導入

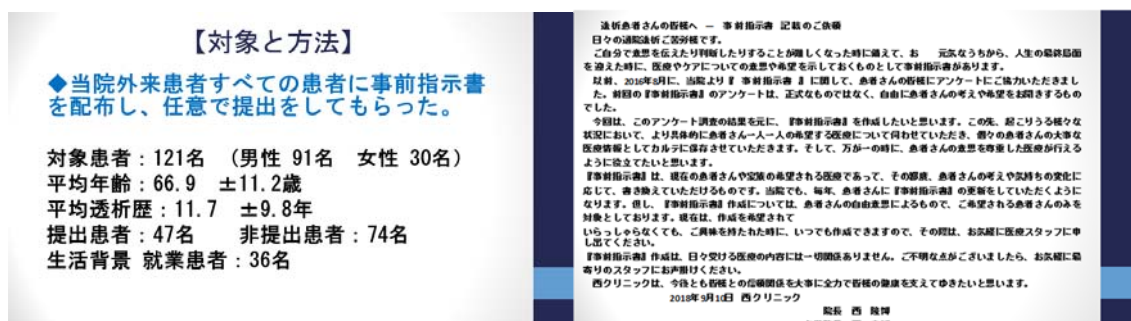
博樹会 西クリニック

中井理絵 五味澤智子 鈴木敦子 一瀬ゆかり 岩切嘉代子  
山川浩子 西隆博 西忠博

【はじめに】事前指示書とは終末期に自分がどのような医療処置を受け、どのような最期を迎えたいか、予め意思表示を示しておくものである。その中に患者が自己決定を行う際の支援、自己決定の尊重について記載されている。透析患者の高齢化が進む中で、意思表示のできるうちに事前指示書を用意しておくことは重要だと考える。

【目的】2017年に我々は本研究会で、「終末期における事前指示書について」アンケート調査の報告をした。アンケートの結果では事前指示書は必要と回答した患者が72%であった。今回当院独自に事前指示書を作成し、運用を開始したので報告する。

【対象と方法】当院に通院している患者121名全てに、事前指示書を配布した。配布の際に医師からの手紙と一緒に配布し、事前指示書の説明をした上で、提出や書き換えはいつでも自由にできること等を記載した。(図1・2)



(図1)

(図2)

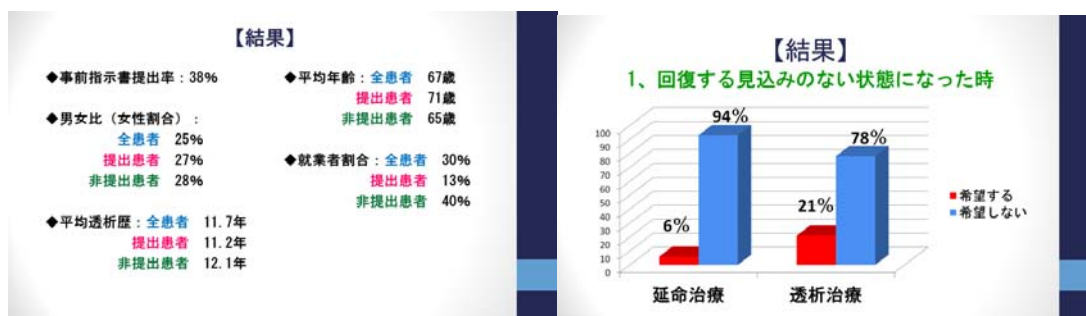
【事前指示書の内容】事前指示書の内容は3つの項目にわけて質問している。

1つ目は回復する見込みのない状態になった時、延命治療と透析治療についてそれぞれ希望の有無を質問した。

2つ目は回復する見込みのない状態になった時に望む医療処置、①点滴や経管栄養、胃瘻などの処置 ②苦痛を和らげる処置 ③人工呼吸器の装着 ④心肺蘇生の処置 ⑤その他望む処置、について質問した。

3つ目は残された人生の過ごし方について質問した。①看取りの場所として自宅で過ごしたいか ②通いなれた透析クリニックで看取ってほしいか ③専門科のある総合病院で看取ってほしいか、のいずれを望むかである。その他に望まれること(①清潔保持のケア ②親しい人への連絡 ③それ以外に自由記載)で質問をした。

【結果】約 1.5 月後の提出率は全患者中 38%だった。男女比での女性の割合は、全患者、提出患者、非提出患者ともに 25%程度で差はみられなかった。平均透析歴も全患者、提出患者、非提出患者を比較しても 11 年から 12 年で差はなかった。平均年齢は提出患者が 71 歳で非提出患者が 65 歳と 6 歳の差がみられ、比較的若い方が提出をしていない結果になった。就業者の割合でも仕事をしていて、提出をした方は 13%と低く、仕事をしていない方の提出率は 40%と高かった。これらのことから比較的若く、仕事をしている患者からの提出率が低かったことがわかる。(図 2)

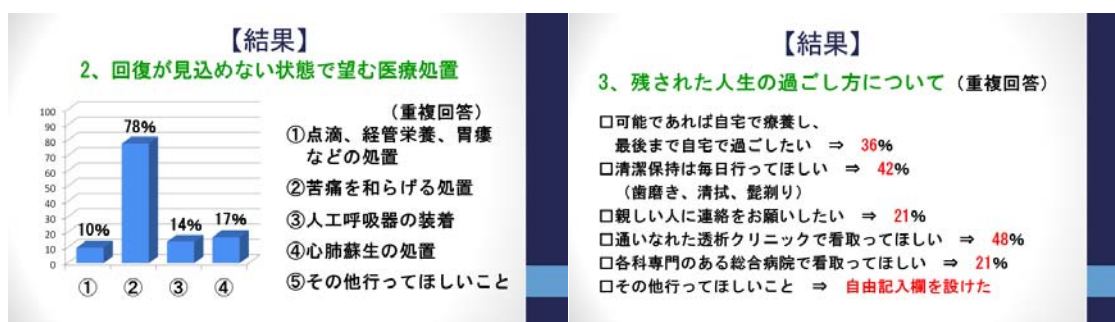


(図 2)

(図 3)

〈事前指示書の回復する見込みのない状態になった時の結果〉延命治療を希望すると回答した人は 6%、希望しないと回答した人は 94%だった。また透析治療に関しては、透析治療を希望すると回答した人は 21%、希望しないと回答した人は 78%であった。(図 3)

〈回復が見込めない状態で望む医療処置の結果〉②番の苦痛を和らげる処置を希望した人が 78%と多く、その他①点滴や経管栄養 ③人工呼吸器の装着 ④心肺蘇生などを希望した人は 15%前後に留まった。⑤番のその他行ってほしいことの自由記入欄には多くの方が。無記入であった。(図 4)



(図 4)

(図 5)

〈残された人生の過ごし方についての結果〉可能であれば自宅で療養したい、通いなれた透析クリニックで看取ってほしいと答えた方が、それぞれ 36%、48%と比較的割合が高く、総合病院よりは、自宅や通いなれた透析クリニックで最後をむかえたいと感じている方が多かった。その他行ってほしいこととして、自由記入欄を設けましたが記入している方はわずかだった。(図 5)

【考察】事前指示書が必要と回答した人は全患者中 72%だったが、実際に事前指示書を提出した人は 38%であった。中でも比較的若年者や、就業者では提出率が低い結果が出た。現時点で仕事を持ち多忙な方に、終末期の質問はすぐに回答が出せるものではなかったと推察された。延命治療は望まないと回答した人が殆どだったが、人工呼吸器装着や心肺蘇生を希望する人も少数おり、矛盾した回答も見受けられた。

質問自体が終末期に対する重要な決定を問う内容が、一般の高齢者にはわかりにくいものだったと考える。医療的な知識は患者個々において様々であるため、事前指示書の内容を簡潔にわかりやすく改善する必要がある。また具体的に望む医療は一人一人と対話して本人の意思を確認しながら個々に事前指示書の作成をしていかねばならないと考えられた。

【結語】今後、事前指示書を毎年更新する上で内容をより簡潔にわかりやすくし、提出率が上がるように、個別面談を含めてアプローチを実施し、終末期における患者個々の意思決定を確認尊重し、支援できるようにしていく。